

〈ある兵隊〉の死

——井上靖『ある兵隊の死』論

1 はじめに

井上靖は戦後、「闘牛」(『文学界』一九四九年一二月)で第二回芥川賞を受賞(一九四九年下半期)したのを契機に毎日新聞社を退社し、文筆活動に専念することになる。戦後文学の新しい時流に乗り、花形作家として活躍する。だが、「闘牛」に先んじて彼が戦後初めて発表した小説は自身の戦争体験をもとにした短篇「ある兵隊の死」(『世界の動き』一九四九年四月)であった。

井上承也の筆名で発表されたこの作品は、のちに「無蓋貨車」(『銃声』(『文学界』一九五一年一月、筆名は井上靖)へとつながり、彼の従軍体験を描いた貴重な記録となる。だが、戦後初めて発表された作品であるにもかかわらず、これらの兵隊ものはほとんど注目されることもなく、「闘牛」などの陰に隠れてしまった。井上靖自身も「銃声」を最後に自らの従軍体験に取材した小説を書こうとはしなかったため、これらの作品を深く探究しようとする動きも起こらなかった。

王 羽 萌

二〇〇八年一〇月、こうした状況に転機が訪れる。井上靖のみ夫人が他界したあと、遺品から井上靖が兵隊として中国に派遣された時の日記や未発表草稿、創作ノートが発見されるのである。これらの資料は、曾根博義の「解説」を付して「新発見 井上靖 中国行軍日記」(『新潮』二〇〇九年一二月、以下「中国行軍日記」として発表され、世間の耳目を集める。戦後、華々しい活躍をした流行作家・井上靖の知られざる表情に焦点が当てられるようになる。井上靖自身も、自分のこの経歴をもとに小説を書きたいと周囲に語っていた事実が明らかになる。同誌に所収することができなかつたその他の未発表資料も、井上靖記念文化財団が発行する機関誌『伝書鳩』が三回(第10号・二〇〇九年一二月、第11号・二〇一一年三月、第12号・二〇一一年一二月)に分けて連載発表した。これら新資料の発見により、井上靖の従軍体験および戦争に対する認識が新たに問い直されることとなった。研究の領域でも、「ある兵隊の死」や「銃声」の読み直しがはじまった。

だが、これまでに蓄積された先行研究の多くは「ある兵隊の死」

と「銃声」を、同一の「事件」を扱った類似作品として処理する傾向があった。井上承也の筆名で発表された「ある兵隊の死」と、それから二年後に井上靖の筆名で活字化された「銃声」のあいだにある断層を考慮せず、ストーリーの展開のみを問題視する傾向があった。

本稿は、こうした読み方をいったん保留し、井上靖という筆名を獲得する以前の彼が、なぜ戦後第一作として「ある兵隊の死」を選んだのかという問題から議論を立ちあげる。作家・井上靖が書きたいと思いつきながら書けずに終わったテーマの痕跡をそこに探し求める。

考察をはじめの前に、これまでの先行研究史を概観しておく。「中国行軍日記」が発見される前の研究状況において論の中心をなしたのは、「ある兵隊の死」と「銃声」を井上靖の従軍体験そのものの反映とみなすような論調である。たとえば、三枝康高は「これら二篇はいずれも同じ事件を扱い、それゆえこれに酷似した事実が、作者の体験のなかに介在していたものと推察される。(中略) 作者がこれら二篇で同じ素材を扱っていることは、そのこと自体がすでに、よほど印象深い体験に裏づけられていることを示している」と述べている。また、福田宏年もこの点を踏まえつつ、「ある兵隊の死」「銃声」の井上靖の戦争に対する姿勢を通して、井上靖文学の本質を垣間見ることができているのではないかと論じている⁴。両氏の論述の仕方に典型的なように、一九七〇年代の研究において「ある兵隊の死」を単体で取り上げる研究は存在しておらず、多くの言説は作家論的な立場から作者の戦争体験を意味付けようとしている。逆にいえば、「ある兵隊の死」を単独

の作品として自律させるような視点がそこには欠落しているといえる。

こうした研究方法が劇的に変化するのは、「中国行軍日記」の発見によって「事実」と虚構、作者自身の体験と表現の落差が明らかになってからである。さきに紹介した「解説」のなかで曾根博義は、井上靖は「兵士としての自分のふがいなさと後ろめたさを伴った忘れ難い記憶として何度も反芻」していると指摘し、「ある兵隊の死」「銃声」を従軍体験の「事実」を描いた作品としてではなく、「自分を責め、罰したい」という自己省察の念にかかれて書いた作品だと評価した。「ある兵隊の死」において、所属する部隊を離れて逃亡兵になり果てた兵士が自責の念にかられて自殺を試みる場面について、「かつて「弱い兵士」であった自分をいったん殺すことによって、戦後、あらためて小説家として強く生きることを決意した」のではないかと指摘し、井上靖が、なぜ戦後に従軍体験に取材した作品を書かなければならなかったのかという必然性を論じた、曾根は、「中国行軍日記」を精読することで、いままで曖昧に処理されていた井上靖の従軍体験を明確に整理し、「ある兵隊の死」「銃声」を新たに読み直していく可能性を切り拓いたのである。

しかし、その一方で、曾根の分析は作者自身における戦争体験の解明という巨視的なスタンスを取っているため、主人公の自殺のモチーフを作者個人の問題に収斂させてしまっているようにみえる。「ある兵隊の死」に登場する小杉一等兵がそのまま作者の従軍体験と重ね合わされ、戦後を生き延びた井上靖のなかにわたかまっていた後ろめたさの問題として処理されてしまっている。

だが、果たして「ある兵隊の死」は小杉一等兵という個人の死を描いただけの作品だといえるだろうか。設定上、井上靖の実体験と酷似しているとしても、それを即座に作者個人の認識へと還元することができのだろうか。

「中国行軍日記」と「ある兵隊の死」の間には軍隊からの「脱落」に関する経緯や軍医からの厳しい扱いなどに関していくつものズレ¹¹差異がある。たとえば、実際の井上靖は、軍医から「脚気」の診断が下されたあと、すぐに後送が決まり同じ部隊の兵隊に見守られながら元氏の駅で上り列車を待ったと記している。だが、「ある兵隊の死」における軍医は、「私大を出たばかりの若い中尉」であり「初めから小杉一等兵の、あまり例のない症状に対して好感をもっていなかった」と描写される。小杉一等兵が「神経性のものだろうと思います」と説明すると、「生意気を言うな。神経だと思ったら、それを克服しろ」と怒鳴りつける人物として描かれる。この点に関して曾根博義は、「部隊からの脱走や逃亡といった軍規に違反する行為も、元軍医監（少将）の父隼雄の手廻しもなかったと見てよい」と指摘しているが、ここで重要なのは、父親の便宜があつたかなかつたかではなく、科学者の端くれであるはずの軍医が彼の症状を精神の怠慢と見做し、精神力によって「克服しろ」と命じている事実そのものである。作者・井上靖は、そこに自身の体験を超えた問題、すなわち、軍隊という組織の構造的欺瞞を見てしまっているのである。

さらに、「ある兵隊の死」では、軍隊の日常ともいえる「行軍」に焦点が当てられ、短篇作品としては異例ともおもえる分量でそれを克明に記している。強いられる「行軍」によって本来の身体

的なリズムが奪われ、それが脚気の症状をさらに重篤にする、というかたちで個人の身体的なリズムと集団の動きが鮮やかに対照化されている。事実の記録としての「中国行軍日記」と小説作品としての「ある兵隊の死」とのあいだには、それぞれを突き合わせて読むことではじめて見えてくるズレ¹²差異が存在しているのである。

そこで本稿では、特に「行軍」に関する記述を追うことで、井上靖が小説というかたちで表現しようとしたものは何だったのか、軍隊から脱落した小杉一等兵が「ある兵隊の死」として匿名化されていく過程において、作者・井上靖の作為がどのように働いているのかを検証する。

2 コントロールされる身体

「ある兵隊の死」の主人公である小杉一等兵は、輜重部隊の兵隊として軍備物資を運ぶ任務に従事している。それは戦争遂行という大きな目的を担っているが、ひとりの兵士に過ぎない彼がそうした俯瞰的な立場でものを考えることは許されていない。日々、苦しい「行軍」を続ける小杉一等兵には、それが何の役に立つのかも分からないし、ひとつの仕事をやり終えたという達成感を覚えることもない。「兵隊たちは鉄蹄をすべらして跳ねあがる馬のくつわを両側からおさえ、ぬかるみの飛沫を頭から浴びて、車輪を手で動かして車を進めていた」という冒頭近くの描写が明らかにしているように、軍隊の「行軍」は、乗り物として用意したものが重い荷物に変質してしまうような自己矛盾ともにある。

こうした無駄がさらなる無駄を作りだしていくような構造は、彼の脚気症状にもあてはまる。「四肢が自分のものでないような虚脱感を感じて来た。そして殆どそれといっしょに、ざわざわと心臓の鼓動が烈しくなり、もうそのまま行軍をつづけていられない不安感が彼の全神経を占領するのであった（中略）それと前後して心臓は鉄板にでも締めつけられるような苦しみにおそれられた」という描写からも分かるように、彼の症状はかなり重篤な状況にあり、病兵として療養すべき段階にあると推察される。だが、彼が苦しうにすればするほど、若い軍医はそれを大袈裟な偽装と見做し、精神の「克服」を促す。つまり、「行軍」を続ける限り、彼はがんばればがんばるほど厄介な荷物になっていかざるを得ないのである。

ある日、小杉一等兵はそうした生活を断ち切るために、「はっきり意識して、計画的に」脱落を決意する。軍隊から離脱した彼は、雪原をただひたすら彷徨う。語り手はその〈歩く〉身体を執拗に追い続ける。

では、この〈歩く〉身体について「中国行軍日記」はどのようなように描いているだろうか。「中国行軍日記」は、一九三七年八月二十五日から翌年三月七日までの半年余りの記録だが、そこには以下のような記述がみられる（必要箇所のみ抜粋）。

十月九日（土）（277K）

部隊の先頭付近に馬骨サン乱、自動車は正面に弾をうけこわれてゐる。人家、人影なし。泥土股を没し人馬す、まず、小休止多し。靴がぬれたし足もいたいので地下タビ。

十月十日（日）

今日は午後鉄道線路に沿ひ、埃りの中をバク進、砂が昨日同様二寸ぐらい積つてゐる中を強行軍。

十月十一日（月）

四時小雨でめざめる。焚火する。出発七時、小雨がある。川の傍で使用。午前は薄曇りの物凄い風、噂で聞いた黄塵万丈。今日も鉄路に沿つて行軍。

十月十二日（火）

あ、行軍六日、遂に保定に来た。（中略）保定、保定と四十里死物狂ひでやつて来たが、また明早朝直ちに正定へ向かつて進軍の命下る。どうにでもなれといふ気持。今度は相当危い跡だ。

十月十三日（水）

今日は九時方順橋に向かつて進軍。午後二時烏馬庄着。（中略）流石に疲れて動けない。

十月十四日（木）

五時起床。ひどく疲れて牀がいたい。（中略）今日は中隊長より誰も乗つてはいけないと命令がでる。上官に曖味はなく、軍隊といふところはたゞ辛だけ。（中略）今日は腹工合悪いせいか朝からひどく疲れて死物狂ひの行軍だ。

十月八日（月）

石家莊→欒城→趙州を眼指しまた行軍。（中略）今日は歩く。気を強く持たぬと死んで了ふ。（中略）それでもこの先々の強行軍にこの沢山の躰の故障が堪へられそーもない。

十月十九日（火）

五時起床。久しぶりで休養。行軍はもうつくづく嫌だ。

十月二十七日（水）

四時前に欒城着、又明日行軍ときいてがっかりする。

十月二十八日（木）

元氏に向つて行軍（中略）昨日、一昨日の強行軍にさすが疲れてゐる。相変わらず車輪をみつめ湯ヶ島のことを考へて歩く。小雨、寒し、寒いけれど汗がびつしより。最後尾だけに凄い強行軍、殆ど半分はかけ足。豆はできてゐないが足が重くて上がらぬ、内地ではたれもこんな苦勞を想像してゐないだろー。あ、宿無し部隊は嫌になつた。

十一月十九日（金）

突如八時半、部隊は順徳に向つて明朝出発。三泊四泊の予定。この命令にはさすがに全中隊色を失ふ。凱旋どころではない。雪のため路は物凄いいぬかるみ。難行軍であることは必定だ。
（中略）駅でみなと別れる。ひどいいぬかるみ路——これが何十里つゞくと思ふと、明日からの行軍の辛さが思ひやられてみんなにはすまない気がする。（傍線は引用者による。以下同）

日記にあるとおり、「行軍」は井上靖の軍隊生活のなかでも特に辛かった体験として刻印されている。そこには自分自身の判断や思考はいささかも感じられず、ただただ「命令」によつて動かされる身体だけがある。また、十一月十九日の記述からも分かるように、自分がしつかり歩けないせいで他の兵士たちにも迷惑をかけてしまう、という思いがさらに疲弊を募らせる。「強行軍」、

「難行軍」といった表現が度々登場することからも明らかのように、そこには実際に歩かされる兵士たちの現実を知らない上層部が勝手に無理難題を要求している、という意識がつきまとい

る。
実際、井上靖はこうした「行軍」で脚氣に罹るだけでなく、下痢、発熱、気管支カタルなどの病に苛まれることになる。

実際、堀啓『中国行軍徒歩6500キロ』（川辺書林、二〇〇五年七月）は、当時の中国大陸において行われた無謀な「行軍」の実態を明らかにし、その辛さに耐え切れず自殺してしまつた初年兵もいたと証言している。山田朗「兵士たちの日中戦争」（岩波講座 アジア・太平洋戦争5（戦場の諸相）岩波書店、二〇〇六年三月）によると、当時の中国は道路事情が劣悪で、中国側からの妨害などもあつたため、徒歩での「行軍」を選択せざるを得ない事情があつたという。特に、弾薬、食糧、兵站物資の輸送を担う「輜重兵」の場合、輓馬の馱者や馬の消耗を防ぐために馬とともに歩くのは当たり前であつた。「ひとたび作戦が始まれば、戦闘部隊を追求して一日、二〇キロメートルから四〇キロメートル」（山田朗）も歩くのは日常という生活のなかで、多くの兵士たちは肉体的にも精神的にも極限状況に追いつまされていたのである。

さらにもうひとつ。当時の日本軍は兵士たちが身に着ける装備においても過剰な重さの荷物を背負わせる傾向が顕著であつた。吉田裕『アジア・太平洋戦争の戦場と兵士』（岩波講座 アジア・太平洋戦争5（戦場の諸相）岩波書店、二〇〇六年三月）によれば、当時の日本軍において、「鉄帽（ヘルメット）、背囊、小

銃、弾薬盒などの装具や武器を身につけた歩兵の完全武装は、長期行軍のための予備弾薬や食糧などを身につけた場合は、全体の重さ（兵士の負担量）が二〇—三〇キロにも達していたという。その意味で、井上靖が体験した生活とは、「機械化の遅れた軍隊」、「歩兵の脚力と馬に依存」（吉田裕）するしかない軍隊において、その不条理を受け容れ、身体を馴化させていく営みだったといえるだろう。

では、「ある兵隊の死」の小杉一等兵における「行軍」はどのように描かれているだろうか？この作品の語り手は、「行軍」の様子を二つの視点から描き分けている。ひとつは、「兵隊と馬と車輻の長い隊列は、城内の西北隅の広場に集結して、南門に向い、そこから城外へと出て行った。南門の石だたみの坂道を通過して行く車輻部隊の騒音は一時間以上もつづいた。」といった描写が象徴する俯瞰的視線である。ここでの語り手は、遠くから隊列の全体を眺望し、彼らの姿が見えなくなるまでの時間を静かに見守る。空間のパースペクティブと幅のある時間をそれぞれに担保し、兵士たちの統制された身体を写実的に切り取る。

ところが、小杉一等兵の姿が舞台に現れた途端、そうした秩序立った描写は掻き消え、ひとりの無能な兵士が焦点化される。

部隊の最後の車輻が城外の広表たる雪の原に吸われて行つてから、かれこれ三十分ほど経ったころであろうか。二小隊十三班と書いた紙がまだ貼られたままになっている小さい一軒の土間から、小杉一等兵の小柄な姿が現れた。帯剣をつり、銃を肩にした姿で、暫く入口につつ立ったまま、部隊の全員

が集結した広場を見つめていたが、それから雪におおわれて全く姿をかえている城壁に眼を移し、最後に視線を空に向けてると、そのままいつまでも少しあおむけた顔を動かさなかった。眼は冷たくきらきらしていたが、焦点がなかった。衷心しているようにも、興奮しているようにも見えた。薄いぶしょう髻をまばらに長くのばしている痩せこけた顔は、絶望のどん底にあるようにもまた、昂然としているようにも見えた。

これは小杉一等兵が作品世界に初めて姿を現わす場面である。彼は語り手によってズームインされるのではなく、語り手がカメラに捉えている「広場」、すなわち、部隊の全員が発発し終えて誰もいなくなった場所にひょっこり姿を現わした逸れ者として登場する。また、その表情は「絶望」しているようにも「昂然」としているようにも見え、語り手が内面に侵入することを拒絶している。彼は全体としての部隊から零れ落ちた破片であると同時に、語り手からも把握できない他者として認識されるのである。詳細は後述するが、「ある兵隊の死」における語り手は、決して主人公・小杉一等兵の内面を十全に語り尽くそうとはせず、曖昧な部分、窺い知ることのできない領域を残したままにする。それは語り手と主人公の距離であると同時に、語り手の計略でもある。

小杉一等兵が落伍兵としての烙印を押されるようになったのは、二カ月ほど前に「脚気から来る神経症の心臓障害の発作」によってたびたび発作に見舞われるようになってからである。「四肢が自分のものでないような虚脱感」と、心臓が「鉄板にでも締

めつけられるような苦しみ」に襲われるたび、彼は行軍を離れて畠の中に倒れ込むようになっていた。だが、ひとたび発作が鎮まると「憑きもの」が落ちたように「けろり」とした様子を見せるため、彼の苦しみは周囲の人間に理解されない。発作に見舞われると、他の兵隊たちがすかさず「おい、確りしろ」と抱き起こそうとするため、ぐったりしながら「頼むから、ほっといてくれ」と哀願しなければならぬ。語り手は、そのとき彼が抱いた妄想を次のように記している。

彼は苦しみと不安とに闘いながら、弱々しく手を振って哀願した。こんな時、彼はどんなに、われとわが傷をなめながら流れて行く氷山の上に坐している熊を羨んだことであろう。ああ、おれにも、あの熊の孤独と静謐がほしい、と心から思った。それは何年か前、どこかで見た映画のひとつまであった。前後の脈絡もなく、ただ流れて行く氷山の上に乗っている熊の姿が、ふしぎに彼の苦しみでずたずたに裂かれた脳裡に蘇ってくるのであった。

「熊」は外界の環境に関心をもたず、ただ「わが傷をなめながら流れて行く氷山の上に坐して」いる。傷ついた「熊」はどこにも逃げる事ができず、ただ死を待つ運命なのかもしれないが、慌てる様子もなく、悠然と「孤独と静謐」に身を委ねている。

小杉一等兵にとって、「あの熊の孤独と静謐」は叶えられない夢である。軍隊においてひとりになることは、どのようななかたちであれ死を意味するし、その死を黙って受け容れられる

ほど人間はタフにできていないからである。彼は、かつて観た映画の「ひとこま」を想起することで、人間の弱さそのものと向き合うのである。

だが、小杉一等兵が軍隊の落伍者となっていくのは、必ずしも他人に理解されない病に罹ったからというわけではない。彼は「軍服を着ると同時に」「人間らしい考え方と呼吸の仕方」を失い、規律訓練を通して要求される身体の動きを習得するだけで一杯の生活をしてきたのである。

さらに、小杉一等兵を悩ませたのは、軍隊における「行軍」の目的や目的地が機密事項となっており、自分たちが何のために歩かなければならないのか、どこに向かつて歩いているのか、ということすら知らされなかったことである。彼は、命令や指示に従うなかで、思考そのものが奪われていくことを怖れているのである。

さきに引用した冒頭の場面で、部隊を離れて「自由」を手に入れたかのように感じた小杉一等兵は「帯剣をつり、銃を肩にした姿」だったと描写されている。のちに彼が死を覚悟する場面でも、「殆ど無意識に近い動作で、外套を着、剣をつると、銃を肩にして、雪が舞い落ちていく歩廊に出」るのだ。小杉一等兵にとって、これらの一連の動作はいずれも「無意識的」なものである。訓練された身体は彼の身体の引き離せない一部と化しているのである。小杉一等兵は、まさにその呼称が示す通り、心身ともに軍隊規律によって締め取られている。小杉一等兵が感じる「自由」について、長谷川泉は「病兵として、部隊を離脱することによって、小杉一等兵は「自由」をえた。しかし、その「自由」は病(仮病

も疑われている)によってえられたものであり、その結果が「死」をもたらすこともわかっている。ゆえにその「自由」は「死をさえ選べる自由!」としるされている」と論じたが、より厳密にいえば、彼がそう感じるのは一時の錯覚であり、彼には死を選べる自由さえ与えられていないのである。

こうして彼の心身は軍隊という巨大な機構の一部となっているわけだが、ここで興味深いのは、脚氣に罹って「行軍」の列を離れたとき、あるいは、不自由な脚を引きずりながら歩くとさだに、彼はコントロールされない心身を取り戻すことができるということである。彼は脚氣の症状を「四肢が自分のものでないような虚脱感」とよび、それを呪わしい「憑きもの」のように感じているが、そこには、自分の「四肢が自分のものでないような虚脱感」に襲われた瞬間こそが、唯一自分を取り戻す瞬間でもあるというジレンマがある。

作品の前半部分における語り手は、そんな小杉一等兵の心身を執拗に追い、彼の「意志」と「神経」の齟齬を、「自分でも知らないうちに仰向けになったり、うつ伏せになったりして、発作のしずまるまで、苦悶と不安の中にならうった」などと表現する。発作のとき、視覚、聴覚の機能が失調し「周囲の現実の世界」を正確な「物象として眺める」ことができなくなる様子を克明に描写し、一定の距離を取りながら、「自分」という拠り所を見失った人間の不如意を捉える。それもまた「ある兵隊の死」という作品における語りの特徴のひとつといえるだろう。

元氏から順徳への発進命令が下った夜(それが作品冒頭場面の前夜となっている)、彼は烈しい発作に見舞われる。日頃から彼

の病状に疑念をもっていた若い軍医は、病院への「後送」ではなく、「車輛にのせて、連れて行け」と指示する。「行軍」する兵士たちを尻目に、ひとり揺れ動く車輛に積まれて運ばれる自分を想像した彼は、ついに「逃亡」を決意する。

吉田裕「アジア・太平洋戦争の戦場と兵士」(前出)によれば、当時の日本軍にとって「兵隊は消耗品」として認識されており、日中戦争の長期化にともない「軍が必要とする兵員数を確保するために、体位の劣る青年をも徴集し、召集せざるをえなくなつて」いた。逆にいえば、重篤な患者であつても簡単に「後送」するわけには行かない事情があつた。小杉一等兵の命運には、そうした軍隊の事情が大きく影を投げかけているのである。

このとき小杉一等兵は、城壁のうえに立つ歩哨の役目を終えた自分が、「大陸の大きな興亡の歴史」を背景にもつその城壁を眺めているうちに、中学生の頃よく行つた郷里の城址を連想したことを思い出す。そこは、「崩れ罹つて苔むした石畳、石畳の間から生えている赤い実をつけた灌木、蔦やかずら」しかない荒れ果てた光景だが、彼はそんな「日本のこぢんまりした風土」を想起することで「病的な神経を休める」ことができたと感じる。

ここで重要なのは、彼が郷里そのものを懐かしむのではなく、「この城壁の上の一隅の暖い雰囲気」、そこに漂う「自然の愛情」に身を委ねていることである。郷里との連想で彼が思い浮かべる母親や弟妹は、みな苦しく暗い表情をしている。独身である彼には愛情を注ぐ相手もない。つまり、いまの彼を支えているのは郷里である日本や、日本に残されている家族たちへの思いというよりも、いまの自分を優しく包み込んでくれる「この場所」に他

ならないのである。こうして、彼は「この場所」で死ぬことを考へる。「銃身を両手で握り、足指でひきがねを引く自分の姿」を想像し、「満ち足りた喜び」さえ感じるようになる。「病み疲れた彼の神経は、彼にふしぎなほど死を怖れさせなかつた」。

ところが、「死の報せを受け取った時の郷里の家の有様」に思いを馳せた彼は「四肢をがくがくと震わせ」て慄く。直前にある、何カ月かして、あるいは一年も二年も経つてからのことかも知れないが、自分の死はおそらく戦死として発表されるであらうと思つた。他の部隊の兵隊で自殺した者が、名誉の戦死として発表されたという話を彼は前に聞いたことがある。

という記述からも明らかのように、彼の死は軍隊によつて捏造されることになる。「自殺」ではなく「名誉の戦死」であればこそ、遺された家族に恩給が支給されることになるし、母や姉妹たちも世間から冷たい視線を浴びることなく生きていける。それは兵士としての本懐といえるのかもしれない。

だが、それは同時に彼自身の生と死が偽装されることでもある。彼がどのように生き、どのように死んでいったのかという真実が永遠に封印されてしまうこともある。彼は、自分の死を嘆き悲しむ家族の様子を思つて身体を震わせるのではなく、自分という存在が軍隊という機構に横領されてしまうことを怖れるのである。

このあと、城壁から雪におおわれた原野を展望した小杉一等兵の眼に映つた光景は、「河川も丘陵も樹木も、そしてところどころ

ろに散在して見えた小さい部落の茂りもすべて白一色に塗りつぶされ、一望の雪の野というより、白一色の死の景観であつた。あらゆる生物は死滅してしまつたかのようにあつた」と描写され、雪の白さが「珪瑯質」に喩えられるが、それはのちに彼が思ふかべる「真つ白い梅の花」の「白さ」との対比となつており、作品の前半と後半を接続する伏線として機能しているといえるだろう。

3 老上等兵の「構わない」優しさ

城壁のうえから平原を見下ろしていた小杉一等兵の眼に飛び込んできたのは、「動くとも見えない部隊の長い隊列」だつた。「豆粒のように」小さい車輛や兵隊たちを眺めているうちに、彼は「自分の属していた部隊を、初めて第三者として客観的につき放してながめて」いることに気づく。ついさつきまで自分が所属していた部隊が「ひどく貧しく、無力」なものに見えてくる。「大自然の非情」を前にした部隊は、どこまでも「かほそ」く、普段は優しく包み込んでくれていたはずの城壁までもが「きびしく彼を拒否している」ように感じられる。「どこかで自分の生命を断たねばならぬ」と思いつめながらあてもなく彷徨う小杉一等兵は、そうした大自然の冷酷さに「本能的な畏怖」を感じる。思うに任せない脚を引きずり、雪解けのぬかるみをびしょ濡れで歩くうち、身体は感覚を失い、頭の芯だけが「冷たく冴え」ていく。

彼がひとりの老上等兵と出遭うのはそのときである。小杉一等兵が「N部隊の病兵」だと知つたこの「大柄な兵隊」は、「半分

地方人の言葉」で、「後送患者か。ひどく参っているじゃないか。早く駅へ行つて暖まるんだな」と声をかける。小杉一等兵は、それが「労わりある口調」であることを察知する。軍隊のなかで命令や指示ばかり聞かされ、たとえ具合が悪くて倒れ込んでも、「おい、確りしろ」と抱き起こされるような日々を送っていた彼にとつて、ただ「労わり」だけを伝えてくれる老上等兵の言葉は、身に沁みるほど特別なものだったのである。

「四十年輩」と思われる老上等兵から、「よし、おれも帰るから、いっしょに来な」と言われた小杉一等兵は、「急に心の底から暖まってくるもの」を感じ、「この兵隊の傍なら死ぬる」と直観する。軍隊によるコントロールから逃れるため死に取り憑かれていた小杉一等兵の運命はここで大きく舵が切られることになる。

駅の待合室に戻った彼は再び発作に襲われる。老上等兵は何も言わずにアンペラを敷き、そこに彼を横たえてくれる。呆気にとられた兵隊たちは水を差したりもするが、いまの彼にとつてはそれも「迷惑」にしか思えない。兵隊たちの「油によごれた大きな汚い手」を見た彼は、せつかく与えられた水筒すら土間に落とすしてしまふ。

それは、作品のラストシーン近くにある「彼は画家志望の青年であったが、二年間の野戦生活は、彼の手を大きく遅しいものにしていった。体も顔もやせていたが、手指だけはいまも太く頑固だった」という一節とも見事に対応している。彼がそこで見た兵隊たちの「油によごれた大きな汚い手」は、まさに自分自身の手でもあり、「野戦生活」のなかで露と消えていった彼の夢の代償でも

あるのだ。

そんなとき、老上等兵は「苦しうだ。ほうっておいてやんなよ。構わない方がいいだろう」と言つてくれる。その声を聞いた小杉一等兵は、「母も弟妹も、親しい友達も未だ嘗て、これ程、彼の苦しみを抱きとつて、やさしく労ってくれる愛情深い言葉を彼に与えたことはない」とさえ感じる。そして、連続的に襲ってくる発作に耐えている彼の臉に、なぜか「白い梅の花」があらわれる。

小杉一等兵はもう長いこと、臉に白い梅の花を描いて、その花の白さばかりを思いつめていた。眼を瞑り、体をまるく縮め、両腕を胸のところに組んでいた。彼はほんとに美しく純白の花弁をひしと抱きしめている気持であった。いくら見詰めても倦くことのない白さだった。一個の固いつぼみが次第にふくらんで、五つの花弁が開ききまるまでの、その微かな小さい動きを彼ははっきりと臉の上に描いて見ることができた。／何回も何回も、真白い梅の花の開くさまを、彼は大切なことでも復習するように、倦かず臉の上に思い描いていた。そして梅の花のころまでが、彼には分るような気がするのであった。／（梅の花は、きつと、散る時よりも、開く時の方が悲しいのだ）／こんな判りきつたことに、どうして自分は今まで気付かなかつたのだらうと思つた。

梅の花が咲くときの「微かな小さい動き」。それは軍隊で強制されている動きとはまったく異なるものである。蕾が花を開かせ

るとき、梅の花は自らの力を充分に溜め、咲く瞬間にその力をいっきに解き放つ。それは「自然」のリズム、すなわち、脈々と続く生命の営みである。咲いてしまったら、あとはそのまま散る瞬間を待つだけである。「梅の花は、きつと、散る時よりも、開く時の方が悲しいのだ」という内言は、生きようとして力を込めることと自体が死へと向かうことでもあるような生命の不条理を指し示している。彼は、そんな「白い梅の花」を「倦かず臉の上に思い描く」ことで、自分という存在のありようを「復習」するのである。それは、さきの「流れて行く氷山の上に坐している熊」とも符合している。

そこにあるのは、紛れもなく死のフィルターを通して生を逆照射するような末期の眼である。彼は、「自然」が垣間見せる生命のリズム、死が生の一部であるような「自然」の営みに身を委ね、束の間の安らぎを得るのである。

また、ここに想起される「白い梅の花」でもうひとつ重要なのは、その「白さ」が「いくら見詰めても倦くことのない」美しさを秘めていることである。さきに引用した原野を覆う雪の「白さ」が硬くて冷たい「瑛瑯質」のイメージであったのに対して、ここでの梅の花の「白さ」は、微かなあたたかみと柔らかさをもっている。押しつけがましいところなど些かもなく、ただ静かに花を咲かせる生命のあたたかみである。彼は、老上等兵のさりげない「労わり」を回路として、そのかけがえのない「白さ」と出会うのである。

「こんな判りきったことに、どうして自分は今まで気付かなかったのだろう」と思いながらわれに返った小杉一等兵は、外套

から顔を出し、はじめて「あたりを見まわす。すると、さつきまで苛立たしく感じられていた兵隊たちの様子が、急に違ったものに思えてくる。そこが「山小屋」であるかのような錯覚に囚われた彼は、燃えるストーブに集まって暖をとる兵隊たちのなかに「人間の孤独な魂が火を求めて集り、ひそひそと語り合っている」ような「さびしさを持った暖かさ」を看取するのである。

ここでの、「さびしさを持った暖かさ」という表現が、さきに描写された梅の花の「散る時よりも、開く時の方が悲しい」という言葉と同様、オクシモロン（＝撞着的な響きをもっていることはいうまでもない。放っておくことがやさしさであること。

「さびしさを持った暖かさ」があること。花は「散る時よりも、開く時の方が悲しい」ということ。彼がそうした認識に到達した契機は、すべて老上等兵との邂逅によって得られたものなのである。

そんな束の間の感傷を引き裂くかのように、ひとりの兵隊が入ってきて、「おい、二十分すると汽車が入るぞ」と叫ぶ。老上等兵はここでも、「貨車が来るから水筒に湯を入れておきな、湯はストーヴにかけてあるぜ」、「どうせ、この雪では汽車もおくれるが、明日の朝までには石家荘に着くだろう。病院でゆっくり養生するんだな」と言い残してその場を去る。彼は明日を生き抜くために最低限必要なことだけを伝えるのである。

ここで老上等兵がいう「どうせ、この雪では汽車もおくれるが」という言葉には、深い洞察が含まれている。それは「おくれる」ことを気にするなというメッセージを含んでいる。軍隊の規律や命令によって心身をコントロールされ全体からズレていく

こと、全体と同じように動けないことに苦悩していた小杉一等兵にとつて、それは天啓ともいえる言葉だったのではないだろうか。

上りと下りとどちらの汽車に乗るかという選択を迫られた小杉一等兵は、「自分は仰向けに転るのであるか。俯伏して醜く這いつくばるのであるか」と逡巡する。それまでも死を意識することはあったが、ここで彼ははじめて自分の死をリアルな現実として受け止めるのである。

このとき、小杉一等兵は初めて「死の恐怖」に縮み上がる。こんなに辛い思いをしてきた自分が、「なぜ、さらに弾丸を打ち込まれなければならぬのであろうか」という疑念に襲われる。それまで、ただ生きることの苦しさを逃れるために死を夢想していた彼は、ここではじめて、自分を死へと追い込む何者かへの「敵意と怒り」を覚えると同時に、「死の恐怖」を覚える。

だが、彼の身体は「殆ど無意識に近い動作で、外套を着、剣をつると、銃を肩にして」しまう。心は「死の恐怖」に襲われているのに、身体は軍隊に順応しようと作動してしまう。語り手は、「死ななければならない」という考え以外、もういかなる思念も、彼の心には存在しなかった」と綴っているのに、彼の身体は上り列車に乗って軍隊に戻るための準備を整えはじめるのである。

こうして頭で考えることと身体の反応とが真逆になってしまった彼は、最後の抛りどころとしてあの老上等兵のあとに従うことを選ぶ。何も考えず、ただ老上等兵のあとを付いていこうとする。「老上等兵の赤い携帯燈が線路つたいにゆれて次第に遠のいて行く」のを見つめ、「その携帯燈の光が見えなくなった時は、自分の最後の時だと計算」する。語り手はその心境を以下のように記す。

す。

……その赤い光だけがこの世の中で小杉一等兵の現在の孤独な心を支える唯一のものであった。それが消えても、なお生きて行けようとはとうてい小杉一等兵には思われないのであった。

この一節をもって「ある兵隊の死」という作品は幕を閉じる。多くの読者にとつて、それは唐突かつ理解できない閉じ方である。主人公は生き延びるために「携帯燈の光」の後を付いていこうとしているのに、語り手はその結末を記さないまま、作品を強制終了させ、「ある兵隊の死」というタイトルまで付してしまふからである。作品のラストシーンにおいて、生と死の狭間を揺れ動く小杉一等兵の内的葛藤を描きながら、なぜタイトルは「ある兵隊の死」なのか？ ときに小杉一等兵の内面を克明に描き、ときに距離をもつて傍観するようなスタンスを取る語り手は、なぜ彼の行方を最後まで見届けようとしなののか？ そこにこの作品の核心がある。

4 〈ある兵隊〉の死

吉田裕『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』（中央公論社、二〇一七年二月）によれば、病弊が認められず軍隊から逃亡を試みる兵隊はそれほど珍しくなかったようである。個々の部隊内での私的制裁や傷病兵に対する「処置」という名の殺害行為

もあとを絶たなかった。こうした非人間的な扱いによって精神的ダメージを負い、自殺に追い込まれる事例も多く、当時、日本軍は自殺する兵隊の数が「世界一」だと言われていた。若い軍医が小杉一等兵の発作を正しく診断せず、「後送」措置を取らなかつたこと、あるいは、小杉一等兵が「神経性のものだろう」と思いますが」と弁明した際、「生意気を言うな。神経だと思つたら、それを克服しろ」と怒鳴り返されていることからわかるように、軍隊内には過剰な精神主義がまかり通っており、落伍した兵隊を足手まといな存在として扱ふ風潮があつた。「後送」が困難な状況下では、「処置」という名のもとに、病兵を薬殺したり自殺を促したりすることもあつたという。

その一方、自殺にせよ逃亡にせよ、死んでしまった兵隊に対しては、書類上、それを「名誉の戦死」とするための様々な措置が取られた。残された家族もまた、夫や息子が「名誉の戦死」を遂げたことで恩給をもらい、地域の人々からも称賛される生活を送ることができた。いづれにしても、彼らは個人としての死を記憶されるのではなく、不運な兵隊のひとりとして葬られることが多かった。

「ある兵隊の死」における語り手は、そのような軍隊の機構そのものを掌握したところから主人公たちを見つめている。個を抹消する軍隊システムの暴力性を知りぬいているがゆえに、最後の最後まで小杉一等兵、老上等兵といった階級付きの呼称を使い続ける。ひとたび部隊を離れてしまった小杉一等兵の行く末が、彼自身の意志や行動によって決まってくるのではなく、上層部の胸先三寸によって処理されていくであろうことを知っているからこ

そ、語り手は「赤い携帯燈の光」を追って歩きはじめた彼の行く末を描かないまま作品を閉じたのである。

その意味で、「ある兵隊の死」というタイトルは、ひとりの人間である小杉一等兵を凝視し続けた語り手が、彼の生涯にピリオドを打つように記したのではなく、軍隊という機構のなかで彼がどのように処理されていくことになるかを見越した語り手が、その不条理を逆説的に浮かびあがらせるために付したものととして解釈できるのではないだろうか。この作品のタイトルには、ひとりひとりの兵隊の死が抹消され、無数の「ある兵隊」たちの死に還元されていくような機構への告発が込められているのである。

作者・井上靖は、学生時代に書いた習作でも同様の題材を扱っている。それは「戦友の表情」(『京都帝国大学新聞』一九三八年六月五日)という作品である。この作品は、「ある兵隊の死」と類似した素材を扱っているが、そこには「山本」「木村」といった固有名が登場し、ひとりひとりがどのような人生を歩んできたのが明確に記されている。だが、彼らは兵隊となつた瞬間から個性を抹消されてしまう。「戦友の表情」というタイトルは、ひとりひとりの戦友たちがもっていた「表情」が奪われていくことへの抵抗という意味をもっている。

「戦友の表情」と「ある兵隊の死」を接続してみると、作者・井上靖にとつての戦争あるいは軍隊というテーマが明確になる。彼にとつての戦争とは、ひとりひとりの人間がその「表情」を抹消され、「ある兵隊」として死んでいくことを宿命づけられるものであり、軍隊はそれを合理的に遂行するためのシステムに他ならないのである。

注

- (1) 井上靖「無蓋貨車」『新聞協会報』第六九〇号、一九五一年一月一日。のちに掌編小説集『青いボート』（光文社、一九五八年）、『井上靖小説全集』第三卷（新潮社、一九七四年）、『井上靖自伝的小説集』第四卷（学習研究社、一九八五年）に収録（『井上靖全集』第二卷、新潮社、一九九五年）。
- (2) 曾根博義「新発見 井上靖中国行軍日記 解説」『新潮』新潮社、第百六卷第十二号、二〇〇九年十二月。
- (3) 三枝康高『井上靖―ロマネスクと孤独』有信堂、一九七三年九月。
- (4) 福田宏年「解説」井上靖『貧血と花と爆弾』文春文庫、一九七九年九月。
- (5) 曾根博義「未発表草稿「後送途上」解説」『伝書鳩』第十号、井上靖記念文化財団、二〇〇九年十二月。
- (6) 同(2) 参照。
- (7) 曾根博義「井上靖と戦争―従軍日記と戦後の文学をつなぐもの」『語文』日本大学国文学会、第一三六号、二〇一〇年三月。
- (8) 長谷川泉「ある兵隊の死」解説 井上靖『滝へ降りる道 他十編』旺文社文庫、一九七五年九月。

(おう うほう
北京外国語大学日本語学院・本学大学院
博士前期課程特別外国人学生)